講演 3

βラクトリンによる認知機能改善とその神経基盤

梅田 聡
慶應義塾大学文学部人文社会学科心理学専攻 教授

認知症およびその前段階である軽度認知障害の神経基盤に関する研究は、社会的ニーズが一層高まっていることもあり、近年さまざまなアプローチによる研究が行われている。その病態機序は、未だ十分に明らかにされていないものの、関与する可能性の高い要素は絞られつつあり、アミロイドβ蛋白は有力な関連要因のひとつであるとされる。これまでの疫学調査では、乳製品の摂取とアミロイドβの蓄積には関連があることが報告されているが、乳製品に含まれるどの成分が認知症発症の抑制要因になっているかは明らかでなかった。共同研究を実施しているキリンホールディングスの研究グループは、この点について徹底的な分析を行い、認知機能改善ペプチド（βラクトリン）を特定し、その高含有な乳由来の食品素材を独自に開発した。その実際の効果を調べるための共同研究では、記憶や注意機能の改善に着目した実験、および脳波を用いた神経メカニズムに着目した実験を実施した。本講演では、その一連の研究成果についてまとめて解説する。

【ご略歴・うめだ さとし】
1991 年慶應義塾大学文学部人間関係学科心理学専攻卒業、1998 年同大学院社会学研究科心理学専攻博士課程単位取得退学、日本学術振興会特別研究員 (PD) を経て、1999 年慶應義塾大学文学部人文社会学科心理学専攻 助手。2006 年助教授（2007 年より准教授)、2014 年より現職。2020 年慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室 兼担教授。
2006 年より、ロンドン大学認知神経科学研究所・神経学研究所・国立神経学神経外科病院 訪問研究員。博士（心理学)。
現在、日本神経心理学会理事、日本認知心理学会常務理事、日本自律神経学会・日本生理心理学会・日本脳科学関連学会連合評議員、日本心理学会・日本高次脳機能障害学会代議員。